

現行環境基本計画の全体評価について

1 計画の位置づけ

- ・ 京都市環境基本条例第9条に基づき定める環境行政のマスタートプラン。
- ・ 京都市基本計画の分野別計画にあたる。
- ・ 「地球温暖化対策計画」「循環型社会推進基本計画」「生物多様性プラン」の3つの主な分野別計画（個別計画）を有する。

2 現行計画「京都市環境基本計画（2016～2025）」について

（1）計画期間

- ・ 平成28年3月に策定。計画期間は平成28（2016）年度から令和7（2025）年度までの10年間（前計画「京の環境共生推進計画」（計画期間：平成18～27年度）を改定。昭和61年4月に策定した「京都市環境管理計画」がルーツ。）

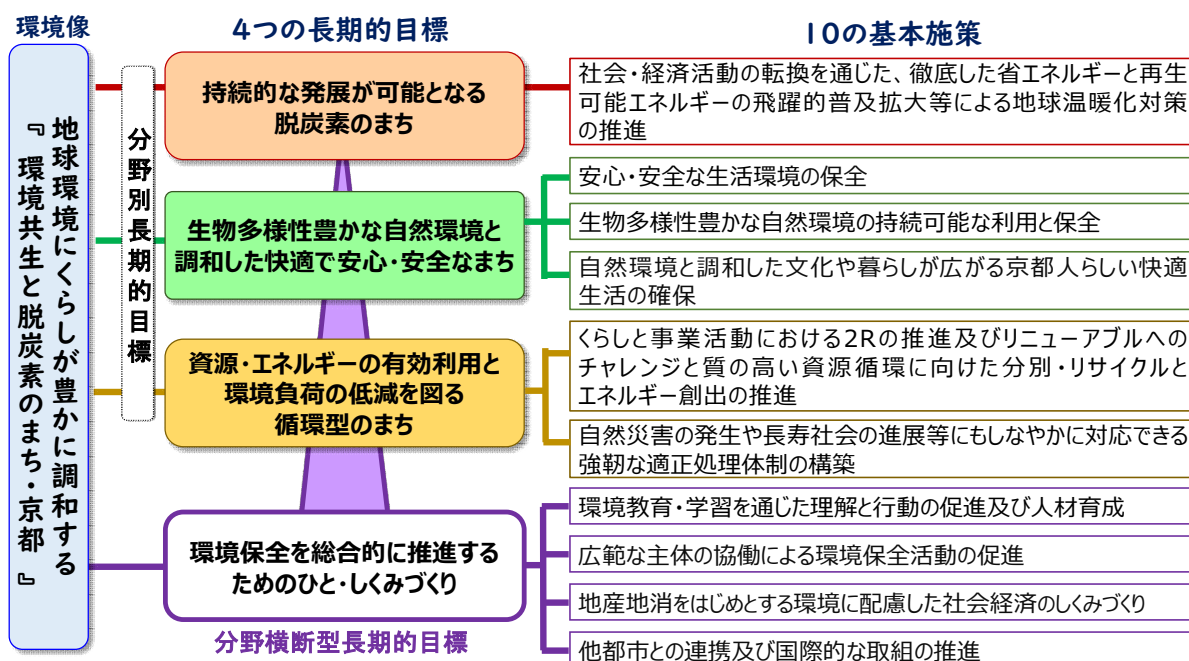
（2）目指す環境像

- ・ 「地球環境にくらしが豊かに調和する『環境共生と脱炭素のまち・京都』を目指す環境像として掲げる。

（3）施策体系

- ・ 4つの長期的目標（3つの分野別目標と分野横断型目標）のもと、具体的施策や取組を推進するに当たっての方向性を示す10の基本計画を定め、それに基づく事業・取組を推進している。

■京都市環境基本計画の施策体系



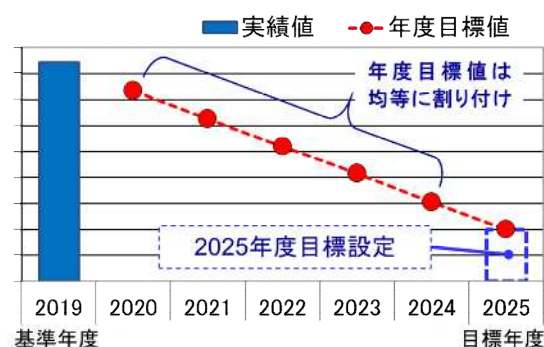
(4) 指 標

- ・ 施策・取組の状況を客観的な数値の実績で把握する「客観的指標」と、アンケートにより市民の実感度を把握する「主観的指標」を設定。進捗状況の点検・評価に用いる。

○環境指標による点検・評価方法

①客観的指標

- ・ 温室効果ガス総排出量削減率やごみ焼却量などの実績値で評価
- ・ 基準年度実績値(2019(令和元)年度の実績値)から目標値(2025(令和7)年度又は2030(令和12)年度)までを直線的に均等に割り付けて、年度目標値を設定(右図)
- ・ 年度目標値に対する各年度の実績値の達成率に応じて5段階(☆☆☆☆☆)で評価



客観的指標の評価区分

評 価	年度目標値に対する実績値の達成率
★★★★★	100 %以上*
★★★★☆	80 %以上 100 %未満
★★★☆☆	60 %以上 80 %未満
★★☆☆☆	40 %以上 60 %未満
★☆☆☆☆	40 %未満

②主観的指標

市民の皆様毎年インターネットアンケート調査(1,000名)を行い、環境の状態や取組の状況に係る設問(例えば「多様な生きものが生息する良好な自然環境が保たれていると感じるか」というもの)に係る実感度を5つの選択項目から回答

この設問に係る回答状況を主観的指標として、選択項目ごとに配点を設定し、各配点と各選択項目の回答者数から5段階で評価。

アンケートの選択項目と配点

アンケートの 選択項目	配点
そう感じる	2点
どちらかと言えば そう感じる	1点
どちらかと言えば そう感じない	-1点
そう感じない	-2点
分からない	0点

主観的指標の評価区分

評 価 (市民の実感度)	評価数値
★★★★★ (とても高い)	0.5 以上
★★★★☆ (やや高い)	0.1 以上 0.5 未満
★★★☆☆ (どちらとも言えない)	-0.1 以上 0.1 未満
★★☆☆☆ (やや低い)	-0.5 以上 -0.1 未満
★☆☆☆☆ (とても低い)	-0.5 未満

(5) 中間見直し（令和 2（2020）年度）

- ・ 中間年度である令和 2（2020）年度に、環境問題を取り巻く状況の変化（パリ協定の発効や IPCC 京都ガイドラインの採択等）や、環境分野における個別計画の改定を踏まえ、計画を一部見直し、令和 3（2021）年 3 月に一部改定。

<中間見直しに係る環境基本計画の一部改定のポイント>

- 4 つの長期的目標や 10 の基本施策などの構成の大幅な変更は行わない。
- 「京都市が目指す環境像」や「長期的目標」等に次の内容を反映する。
 - ・ はばたけ未来へ！京プラン 2025（京都市基本計画）の京都の未来像（めざすべき京都の姿）
 - ・ 持続可能な都市文明の構築を目指す京都宣言（2050 年の世界の都市のあるべき姿）
 - ・ SDGs の考え方（環境基本計画と SDGs 目標との関連について）
- 環境指標の更新
 - ・ 主観的指標（市民の実感度に関する指標）は、経年変化を見る必要があるため変更なし
 - ・ 客観的指標（施策・事業の目標値）は、新たな個別計画の内容を反映させた指標及び数値目標（目標年度）に変更

3 現行基本計画の進捗状況

(1) 環境基本計画の指標の状況及び分野別の成果と課題

① 持続可能な発展が可能となる脱炭素のまち

指標の状況

- 客観的指標の「消費電力に占める再生可能エネルギー比率」は目標値を達成し、「温室効果ガス総排出量削減率」は目標値に対する達成率が86%、「エネルギー消費量削減率」は72%となっている。
- 主観的指標による市民の実感度は、地球温暖化に対する危機感に関しては「とても高い」、公共交通機関優先の取組に関しては「どちらとも言えない」、残りの2つの指標は「やや高い」となっている。

客観的指標	年度目標値	実績 (2022 (R4) *)	評価結果
①温室効果ガス総排出量削減率 (2013(H25)年度比)	26.2%	22.6%	★★★★☆ (86%)
②エネルギー消費量削減率 (2018(H30)年度比)	6.0%	4.3%	★★★★☆ (72%)
③消費電力に占める再生可能エネルギー比率	21.8%	26.2%	★★★★★ (100%以上)

* 長期的目標1の客観的指標については、2022（令和4）年度の実績が最新値である。

主観的指標	評価結果
①豪雨や熱中症など地球温暖化の影響と思われる危機が自分たちの生活に迫りつつあると感じるか。	★★★★★ (0.92 / とても高い)
②徒歩や自転車、公共交通機関優先の取組が年々進んでいると感じるか。	★★★★☆ (-0.09 / どちらとも言えない)
③省エネルギーや節電の取組が年々進んでいると感じるか。	★★★★☆ (0.29 / やや高い)
④再生可能エネルギー導入の取組が年々進んでいると感じるか。	★★★★☆ (0.24 / やや高い)

成 果

- 温室効果ガス排出量は基準年度（平成25年度）から22.6%削減（令和4年度）。
- エネルギー消費量はピーク時（平成9年度）から約3割減少（令和4年度）。
- 脱炭素先行地域の選定を受け、民間事業者間の連携を核に文化遺産、商店街、住まい等における取組を着実に実行。

課 題

- 温室効果ガス排出量は着実に削減が進んでいるが、近年削減ペースが鈍化傾向にあり、目標達成に向け、更なる対策の強化が必要。

② 生物多様性豊かな自然環境と調和した快適で安心・安全なまち

指標の状況

- 客観的指標は、いずれも 80%以上の達成率。
- 主観的指標による市民の実感度は、「多様な生きものが生息する良好な自然環境の保全」「自然環境と調和した文化や暮らしの広がり」は「やや低い」となり、残りの指標は「どちらとも言えない」となっている。

客観的指標	年度目標値	実績 (2023 (R5))	評価結果
①大気汚染に係る市保全基準達成状況 *	100.0%	83.3%	★★★★☆ (83%)
②水質汚濁に係る市保全基準達成状況	100.0%	90.9%	★★★★☆ (91%)
③京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組者数	470 者	390 者	★★★★☆ (83%)

* 測定項目ごとの市保全基準達成率（市保全基準を達成した回数／全測定回数）を平均したもの

主観的指標	評価結果
①空気や河川の水がきれいに保たれていると感じるか。	★★★☆☆ (-0.02 / どちらとも言えない)
②多様な生きものが生息する良好な自然環境が保たれていると感じるか。	★★★☆☆ (-0.12 / やや低い)
③自然環境と調和した文化や暮らしが広がっていると感じるか。	★★★☆☆ (-0.12 / やや低い)

成 果

- 京都府と協働で「きょうと生物多様性センター」を設置し、「収集」「利活用」「継承」をテーマに、効果的かつ持続可能な生物多様性保全の取組を推進。
- 「チマキザサの再生」をはじめ、「京都らしさ」を支える生きものや里地里山の保全等を推進（自然共生サイト認定数：10 件、約 257ha）。
- 生きものの生育・生息や人の健康・安心安全を支える、水や大気は環境保全基準を概ね達成。

課 題

- 保全活動の担い手や活動資金の確保等が課題であり、市民・事業者の主体的な保全活動につなげる更なる機運醸成や仕組みづくり等が必要。

③ 資源エネルギーの有効利用と環境負荷の低減を図る循環型のまち

指標の状況

- 客観的指標の、「ごみ焼却量」、「食品ロス排出量」、「プラスチックごみ分別実施率（家庭）」、いずれも年度目標値を達成。
- 主観的指標による市民の実感度は、いずれも「とても高い」となっている。

客観的指標	年度目標値	実績（ ²⁰²³ _(R5) ）	評価結果
①ごみ焼却量	36.1 万トン	33.8 万トン	★★★★★ (100%以上)
②食品ロス排出量	5.5 万トン	5.0 万トン	★★★★★ (100%以上)
③プラスチックごみ分別実施率（家庭）*	50%	50%	★★★★★ (100%以上)

主観的指標	評価結果
①マイバッグの携帯などのごみを出さない暮らしが広がっていると感 じるか。	★★★★★ (0.97 / とても高い)
②ごみを分別して出せる拠点が身近にあり、ごみの分別・リサイクルが 進んでいると感じるか。	★★★★★ (0.56 / とても高い)

* 「③プラスチックごみ分別実施率（家庭）」については、2022（令和4）年度が最新

成 果

- ごみ量は、ピーク時から 55%減少（平成 12 年度:82 万トン→令和 5 年度:37.2 万トン）。
- 他の指定都市に先駆けプラスチック製品の分別回収を開始するなど、分別・リサイクルの取組を推進。

課 題

- ごみ量は削減が進んでいるが、プラスチックごみ対策をはじめとした「資源循環」に重点を置いた更なる施策展開が必要。

④ 環境保全を総合的に推進するためのひと・しくみづくり

指標の状況

- 客観的指標の「京都環境賞応募件数（累計）」は目標値を達成し、「環境保全活動プログラム参加者数」は目標値に対する達成率が93%、「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組者数」は83%となっている。
- 主観的指標による市民の実感度は、いずれも「やや高い」となっている。

客観的指標	年度目標値	実績（ ²⁰²³ _(R5) ）	評価結果
①環境保全活動プログラム参加者数	280,000 人	261,288 人	★★★★☆ (93%)
②京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組者数	470 者	390 者	★★★★☆ (83%)
③京都環境賞応募件数（累計）	766 件	825 件	★★★★★ (100%以上)

主観的指標	評価結果
①学校や会社、地域で環境学習や環境保全活動の機会が増えていると感じるか。	★★★★☆ (0.25 / やや高い)
②環境に配慮したライフスタイルが広がっていると感じるか。	★★★★☆ (0.26 / やや高い)

成 果

- 環境保全活動センター（京エコロジーセンター）、南部クリーンセンター環境学習施設（さすてな京都）及びきょうと生物多様性センター等において環境教育・学習の取組を推進。

課 題

- 環境問題への前向きな取組についての回答が停滞状況。市民に環境問題を分かりやすく伝え、行動変容を促す仕組みが必要。
- 更なる脱炭素化・資源循環の推進、生物多様性の保全・回復に向けては、地域や企業など多様な主体が連携した一体的な取組が必要。

（２）全体状況

本市では市民・事業者の皆様のご協力の下、全国に先駆けた環境政策を実施し、ピーク時からのごみ半減の達成、エネルギー消費量３割削減といった成果をあげている。

また、施策・事業の実施においても、脱炭素先行地域への選定（令和４年１１月）、プラスチック製品の分別回収（令和５年４月～）のほか、「京エコロジーセンター」や「さすてな京都」などでの環境教育・学習に加え、生物多様性についても府市協働による「きょうと生物多様性センター」の設置（令和５年４月）により多様な主体による取組への支援が進み、全体としては「京都市基本計画」の基本方針に掲げる「自然との共生を楽しむ環境と調和した持続可能な社会」の実現に向け、着実に進んでいるものと考えられる。

一方、市民の実感としてはこうした成果が十分に感じていただけておらず、本市の環境をより良くするための更なる実践の広がりには当たって課題は残る。